

人生ハンド仏句

第157号

H. 27. 4. 1
(毎月1日発行)

知恩・報恩

住職 谷川寛俊

かつて日蓮大聖人は、北国寒山佐渡ヶ島に三ヶ年(五十、五十三歳)の御流罪になられた折、故郷である千葉県(房州小湊)に住む御信者さん宅に出されたお手紙の中に「もとより学問し候しことは、自ら仏になり、恩ある人を助けんと思ふなり(佐渡御勘気抄)」と述べられておられます。自分がこの世に生まれてきた目的は「恩ある人を助けるため」でもあったのだと仰るのです。また、恩には大きく四つに分類され『四恩(しおん)』という言葉をお遣いになり、ご教示下さっておられます。『四恩』のまず一つ目が「父母の恩」。二番目に「国の恩」。三番目に「師匠の恩」。そして四番目に「三宝の恩(仏・法・僧)」を挙げておられます。つまり、自分に関わる全ての人達の恩に報いる為に生を受けたのだと喝破されます。

恩を受けたなら、恩を忘れず、恩

に報いるという事は、互いに支え合う存在である私達人間にとつて決して欠かすことのできない徳性の一つといえます。

先月十七日、真成寺に思わぬ来客が訪ねてこられました。名古屋市在住の後藤正明さんという方です。聞けば、およそ四十二年前、大学生だった後藤さんは、サイクリングで旅行中に真成寺の門を叩かれ、一晩泊めていただきたいとの事でした。そういえば昔は、毎年夏休みなどを利用して、学生さん達が数人、あるいは個人で旅行中に「泊めて下さい」と言って、真成寺の門を叩いたものでした。それと言うのも、泊めてもらった人が、「富山県に行った時は、あのお寺で泊めてもらいなさい」と後輩達に代々伝え、翌年には伝え聞いた後輩達が訪ねてきたというわけです。現代では全国にコンビニエンスストアが5万軒あると言われております。それに比べ寺院は全国に8万軒あります。昔の寺院は、今のコンビニエンスストアよりも便利な場所だったのです。月お越しになられた後藤さんは「当時、お金も無く、突然訪ねてきたにもか

「人生ハンド仏句」と打ち込んで頂けば、ホームページにつながります。

編集・発行
玉蓮山 真成寺
編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268
携帯 080-3744-2523
こちらの番号でもお寺につながります。

ならず、快く受け入れてもらった上にご住職から、魚津で何か美味しい物でも食べてもらえと言って、お小遣いまでいただきました。本日に涙が出るほど嬉しかったです。本日は四十二年前の恩に対してのご挨拶にまいりました」と、わざわざ名古屋から訪ねてこられたというのです。そして封筒を手渡ししながら「仏様にお供え下さい」と感謝の気持ちを伝えられ、名古屋へ戻っていかれました。封筒を開けると、何と十万円もの大金が入っているではありませんか。今どき、このような人がいるんだと本当に驚いたとともに、何かホッとする温かいものを感じました。名刺を置いていかれたので、さっそく魚津のお魚等をお送りしお礼の電話を入れたのですが、奥さんが出られ、正明さんは不在とのこと。その後何度かご連絡するも、本人には繋がらず残念に思っております。そして、お彼岸中日のお参り後、檀信徒の皆様にご連絡をさせていただきました。皆様一様に驚き、それぞれに自身の報恩を改めて考えさせられ昼食の席に着きました。その昼食中に、後藤正明さん本

人から「大変結構な物を送っていただき有り難うございました」と、お礼の電話が入ったのです。その電話の中で、またまた驚かされました。後藤さんいわく「あの日以来、今日までの四十二年間、片時も忘れたことがなく、いつか必ず恩返しをした」と思い続けてきました。これでやっと少し肩の荷が下りました」と言うのです。後藤さんの恩を忘れないという真摯な気持ちに、汗顔の思いとともに、感服と感銘を覚え、当時の住職だった師匠寛徳日龍上人にご報告を申し上げた次第です。

まさにこの尊い浄財を生きたお金にすべく、本堂屋根改修費用に使用させていただく事に致しました。この度の不思議な縁に触れるにつけ、やはり「縁」というのは「他生の縁」とも言うように、どこかで必ず結ばれているのだと痛感致しました。また、お経文にあるように「変化(へんげ)の人」が現れるものと、改めて思い知らされました。時は彼岸の最中、偶然にしてはタイミングが良すぎます。先代の住職から私へのエールと受け止め、冒頭に記した日蓮大聖人のお言葉、「四恩」の大切さというものを再確認し、シツカリ噛みしめたいと思います。

